

浄土

1983-12

昭和十年五月二十日 (第三種郵便物認可) 毎月一回一日発行
 昭和二十四年四月二十八日 運輸省 (特別送達郵便物) 第三二五号
 昭和五十八年十一月二十五日印刷 昭和五十八年十二月一日発行
 第四十九卷 十二月号



一雪明り-

大西耕三

昭和59年度版

浄土宝暦

予約発売開始!!

ふるってのお申込みを!!

◎法然上人鑽仰会が責任をもって編集している「浄土宝暦」。
昭和59年度版がまもなく刷了となります。年末年始の好便
な檀信徒用施本として、広くおすすめいたします。

B 6 判 総ページ数 32ページ

1部単価 65円 (200部以上 60円)

送料実費 (400部以上はサービスします)

●なお、ご寺院名の印刷なども実費にておこないますのであ
らかじめご連絡下さい。

できうるかぎりの便宜もおはからいたしますので、多くの
方々からのご注文をお願いいたします。

.....お申込み.....

〒 102 東京都千代田区飯田橋 1-11-6

法 然 上 人 鑽 仰 会

(振替) 東京 8-82187

十二月号



一切の仏を供養し、諸の徳本を具
足し、願慧ことごとく成満して、
三界の雄となることを得たまえ
り。

——『無量寿経』四誓偈

目 次

法 話

ほんとうに生きる……………八 木 季 生……(2)

◇一年の思い出◇

教化宗団への前進……………高 橋 良 和……(6)

成道会に寄せて

心の散策……………平 野 仁 司 ……(10)

文書伝道のあれこれ……………青 柳 良 巖……(20)

エッセイ

卒業式前後……………木 下 隆 一……(24)

<歌声の時代に対応>

老・若・感謝の姉妹歌……………吉 田 光 覚……(30)

<ずいそう>

京都岡崎・吉田界限(二)……………戸 川 靈 俊 ……(15)

読者の便り

浄 技……………合 田 徹 雪……(36)

仏教行軍図

十二月の行事……………鷲 見 定 信……(44)

◎現代詩コーナー 父子の顔……………坂 田 文 三……(41)

浄土句集……………一 田 牛 畝 選……(34)

表紙 大西耕三画

カット 大正大学美術部

法 話

ほんとうに生きる



近年、宗内で用いられている食作法に、「ほんとうに生きんが為に、今この食をいただきます。与えられたる天地の恵みに感謝いたします」というのがある。古くから使われている食作法は、むずかし過ぎて一般的でないが、この食作法なら誰にでも言い易い。簡にして要を得た言葉である。今では宗門内の

やぎきしょう
八木季生

(浄土宗布教研究所主事
東京・文京区一行院住職)

あらゆる場で、食作法と言えはこの言葉を唱えるようになった。この食作法の中にある「ほんとうに生きる」とは、いったいどういうことを意味しているのだろうか。「ほんとうに生きんが為に」と言うからには、「ほんとうでない生き方」がある筈である。「ほんとうでない生き方」をしがちだからこそ、食

事をする時に「ほんとうに生きんが為に」と唱える訳である。その「ほんとうでない生き方」とはどんな生き方なのか、改めて考えてみると、これもどうもはつきりしない。この辺のところを整理しておくことは、日常生活と関係の深い食作法だけに大切である。

普通に日本語で「いきる」という場合に、その書き方に二通りある。極く一般的に用いられるのは「生きる」という書き方であるが、もう一つ「活きる」という書き方もある。

「生きる」と書いた場合、この言葉の意味するものは、心臓が動き、肺が呼吸し、生命活動をしているということである。だから死んでさえないなければ、たとえ植物人間のようになっているのであっても、生きることに於て変わりはない。同じ「いきる」を「活きる」と書いた場合、余りこの書き方は用いられないが、その意味するところのものは、ただ生命活動をしているだけに止まらず、何かもつとその先に、生き方に就いての方法が問題に

なっている。この「生きる」と「活きる」という二つの表現のニュアンスの相違はどこにあるのか、試みに次の二つの言葉を考えてみよう。

生と活との二つの字の下に、花という字を補ってみるとする。生花と活花とである。生花と書けば、普通には音読にして「せいか」と読む筈である。生花とは言うまでもなく花屋さんの店頭で売られている花であり、地面に種子を蒔いて、そこから芽が出て育った自然の花を指す。次に活花と書いた場合には「いけばな」と読む。活花とは文字通りに花を活かす法であり、花道として古くからの伝統と流儀とがある。それぞれの流儀には独特の特徴があることであるが、花道の心は共通であらうと思う。要は花の持っている持ち味が十二分に發揮されるように、姿、形を整え、いける器を考えて花を活かす方法が花道であらう。花には花の持ち味が、花の心がある。春の花には明るさが、夏の花にはたくま

しさが、秋の花には寂しさが、冬の花には静けさがある。それぞれの花の持つ個性が、味が、十二分に引き出し得るように、一緒にいける花のとり合わせを考え、姿や形に工夫をこらし、いける花器を深く吟味することによって、花が活かされるのである。同じことは料理にも言い得る。料理には味付けが大事であるが、最後の盛り付けも大切である。折角いい材料を使い、味付けもよくできたものであっても、盛り付けが悪いと、箸をつける前に食欲を失ってしまう。逆に料理の技術が少々お粗末であっても、きれいな皿に上手に盛り付けされていると、ついだまされてしまう。料理を生かすも殺すも盛り付けで決まる。花道に於いても、いけかた如何は花の生き死に関係する。花道のいろいろな流儀は、花の活かしかたに対する家元の考え方の相違に他ならない。花の活かしかたには或る一つの法則がある筈である。その法にのっとって活かされた花は、花そのものが活かされるだけで

なく、その花の飾られた場所を活かす力がある。何も無い殺風景な部屋であっても、活花を飾ることによって部屋が活きてくる。あの四帖半の寒々とした茶室が、そこに飾られた一輪の茶花によって活かされるから不思議である。部屋の持っていた飾り気のない寒々とした感覚が、茶道の持つ厳しさとなって感じられてくる。一輪の花の果たす役割は大きいものがある。活花は、その花の飾られた部屋を活かすばかりではない。その部屋に入った人の心まで活かす力を持っている。活花とは本来花を活かす法であるが、花道の価値は花を活かすことによって、それを飾った部屋を活かし、見る人の心を活かすその働きにある。活きた花が部屋を活かし、人の心を活かすことができたように、一つのものがほんとうに活きてくると、その周囲全体が活かされてくる。一軒の家の中でほんとうに活きている人がいれば、その家庭全体が活きてくる。一つの集団にほんとうに活きている人がいればそ

の集団が生きてくる。かくして社会が生き、国家が生き、すべてが活かされる。すべてが生きてくるのに、全体を動かす要はない。その中で中心をなすものがほんとうに活ければ、全体が動かされる。私の中で中心をなすものがほんとうに活さてくれば、私の全体が活かされ、ほんとうに生きる喜びに満たされる筈である。その私の中で中心をなすものとは、何でもいいというのではなくて、「ほんとうに」と呼ぶことのできるものでなくてはならない。私の中で「ほんとうに」と呼ぶことのできるものとは、私を生ましめ給うた大本の親である所の如来から賜った仏の性、仏性において他にない。他の如何なるものも「ほんとうに」と呼ぶにふさわしくない。世間虚仮唯仏是真である。私の中に存在する仏性を活かすことができれば、そのとき私が「ほんとうに生きる」ことのできた時である。花道で花を活かす理法があったように、仏性を活かすのにも理法がある。それが仏法であり仏道

であろう。このレベルで「いきる」と言うときには、始めに述べたような「生きる」と「活きる」の区別はもう必要がない。生きることは活きることであり、活かすことになってくる。「ほんとうに生きる」をこう定義してみると、冒頭にあげた「ほんとうでない生き方」というのがはつきりする。ほんとうでない生き方とは、何時消えてしまいか判からない肉体や名聞利養のみに執着し、欲望の充足に振り回されている日暮らしが、実際の人生だと思つて生きている生き方である。そうと判つていながらも、実際の自己を活かすことを忘れ、目前の損得に血眼になっている毎日を考えて、煩惱無辺だと思つて思ふ。孔子は日に三省すると言つたが、三度の食事の度毎に「ほんとうに生きる」ことに思いを致し、この私をほんとうに生かす為に、あらゆる天地の恵みが準備されていることに感謝して、今日もまた、おいしい、味わいのある食事がしたいものである。

◇◇◇一年の思い出◇◇◇

教化宗団への前進

高橋良和
たかはしりょうわ

法然上人八百五十年をよき勝縁として劇団前進座が、企画した「法然」劇は、昨年の京都、公演を最初に、それ

れから、東京、そして大阪、名古屋と大都会での公演で大きな反響のうちに終えて、本年は春から全国縦断公演ということで、北海道から、鹿児島までの公演をやりあげたのは、特筆大書する八百五十年のこよなき記念事業であった。

それぞれの都市とも超満員の盛況で、補助椅子が出るほど反響があり、その公演の回数の少なかったことをかこつほどあった。

観客動員数は三十万人近くであり、百数回の公演は、見事に成功した。

ある人はいった。生半可な布教をやっているより、このような公演による効果はすばらしい、と感心していたが、劇団前進座としても面目をほどこしたとよろこんでいた。

中村梅之助君は法然劇において、同君は、全く法然上人になりきり、舞台では終始念仏をとなえて芝居をしていたし、七月十一日東京での打上げ後、その芝居に用いた念珠、それも百二十万八百八十八回となえたという念

珠は岡山の誕生寺に奉納され、同寺では永久に寺宝として保有することになった。浄土宗にとっては、まさに一期一会の前進座公演であったといえる。

海の彼方ブラジルでは、新寺が落慶した。

マリंगाの地に、先に老人ホームが建設され、それに つづいてマリंगा日伯寺が竣工したことである。

この落慶には宗務庁から武田宗務総長、知恩院から鶴飼執事長が、一宗的に総本山を代表して参拝している。

このように開教事業とともに、福祉事業を開設して現地の人々に仏の慈悲をつたえるという一石二鳥の開教は、他の如何なる宗旨もやっていないことであり、ブラジル開教を最初に手をつけた本宗の社会福祉事業の開拓者がある大正大教授の長谷川良信師の心が生かされていることに、今更ながら敬意を表したい。

すでに完成した現地の人々にしあわせをあたえているイタケーラの子供の園とともに、サンパウロの日伯寺を中心にブラジル開教は、数こそ少ないが、本宗の独自の開教方針ということで、沖繩の袋中園とともに、その成果が、これから大いにあがることと思う。

その沖繩には、先の袋中寺のほかに、さらに三カ寺が

開教して建てられることになった。浄土宗教団の発展のためには、うれしいことであるといえる。

一昨年の秋から、約一年間「心に花を」運動の一つとしてテレビ放映をやった。

「心に花を」の運動は、これからもつづくと思うが、テレビの放映は、多額の経費も必要とするところから、一カ年過ぎで、その放映を中止したのは、なんとしても惜しい。

「心に花を」運動は、宗門の各種の教化を行うための組織であり、これから資金を充実してすぐに運動を展開することになると思う。

ラジオ放送は十局で、全国に定着しているが、それとともにテレフォン電話という新しい布教形式が実を結びつつあるのは、なによりである。全国の寺院でも相当これを実施して効果をあげている。

本年は、宗会議員の改選期にあたり、さる十月二十六日に六十九名の宗会議員の当選が決定した。

宗門の立法機関であるだけに、当選の宗会議員は、今後の教団の運営を真剣にやってもらいたいと思う。

政争問題が多い我が教団をして、もっと教化宗団とし

ての名実共に整った宗門づくりをしてほしい。

この追想を書くころには、臨時宗会招集のことがあるが、おそらくその宗会は、宗会の構成である正副議長問題や各種主管の選出が、そして総長選出問題が、中心であると思う。明年三月の定期宗会を一つのもめどとして、宗会における建設的な面への移行が望ましい。

教化宗団としてのうれしい計画がある。

かねがね法然上人の少年時代の勉強のところであった那義山の菩提寺のことである。お誕生八百五十年を機会に菩提寺の復興計画として青少年の研修道場の建設が、宗務庁で考究されていた。

環境はよいが、何分那岐山の山麓である。

しかし将来は、鳥取へのバスも通る計画がすめられるし、道も整備され、門前を道路が通っている。

そこで復興計画の一つとして、この研修道場の設置が、具体化している。

建設は、宗務庁が行うが、今後は積極的にすすめられることになって、完成の上は、あらゆる研修に活用されることになると思う。

菩提寺の存在する奈岐町も支援しているので、順調に

すすめられるものと思う。すると菩提寺の復興にも役立ち、一宗としても教化の推進に力が入るだろう。

教化といえば、昨年教化推進会議が開かれて、一宗の教化の行動的な人々が集まって会議した。それにつづいて今回は、年内に九州で、明年は、増上寺で開かれることに決定している。

こうした会議が、地方で開かれることはあまりなかっただけに、地方の教化の推進に大きな役割を果たすことになれば幸いである。一宗の教化は、あまりにもマンネリ化して新鮮味が少ない。

教化宗団としての使命感に燃えるような企画と、実践力が欲しい。これはなにも浄土宗だけの問題ではない筈であるが、明治以来社会福祉乱用とか、近年は教化宗団とか、そのキャッチフレーズはよいが、問題はそれのことについての浸透力であろう。残念ながら、本宗のそれは、浸透力といった面では、やや春日遅々の感がある。

文字の上では、教化であるが、その教化を強化することの指導力をさらにすすめることである。

幸いにも文書布教といわれる活字による伝道は、かなり活発になっている。

浄土宗新聞の創刊は、二百号重ねて記念号が、発刊された。そして二十万部の発行部数になるよう努力することになっている。それには全寺院が、檀信徒にこの新聞を徹底させることである。

なんでもないことのように思うが、新しい宗教では、活字による布教伝道がすばらしい。考えてみれば、それらの伝道書を読んでいる人々は、既成教団、すなわち仏教各宗の信徒であった。

そう考えると、今こそ檀信徒に一枚の新聞を、一冊の本を読ますような教化が、必要ではないだろうか。

聞法というのは、布教のはなしを聞くことだけではない。書物を読むことも、その書物を人にすすめることも聞法である。すなわち、今後の伝道には、この聞法ということを目標に読む布教を考えるべきであると思う。

知恩院の執事長問題が、夏から年末にかけて大きくのしかかっている。

任期満了の鵜飼執事長の後任を、顧問会で三人を候補としたが、その内の一名を藤井門主が指名したことに端を発して、その門主がとった手続上の不合理性を、退陣する鵜飼内局側がとりあげて一向に協力体制がひかれな

いままにきている。

これなどは、この裏に浄土宗務庁が介在しているという知恩院の考えからであろう。

なにかにつけて総本山と、宗務との対立のことが、あらわれた仏縁である。

いづれおちつくところにおちつくことになるとは思いますが、あまり醜を天下にさらすのはどうかと思う。

本年は、大本山法主に異動があつて、昨年の筑後善導寺法主宮本大僧正のあとに一田善寿師が、法主に就任したが、今年は、鎌倉光明寺の石井真峯法主が、遷化したので、その後任には、岡崎大樹寺の藤吉慈海師が、選出された。

英文学者で九十歳になってもまだ英語の指導にあたっていたほど熱心な法主のあとだけに、やはり学問人を選んだのであらう。

そのあとの大樹寺の貫主は、これからになる。

表面的には、とも角も割合いに静かな一年であつたが、さて明年は、どのように動くか、それは年を明けてからにしたい。

成道会に寄せて

心の散策



平^{ひら}野^の仁^{じん}司^し

(大本山光明寺執事
座間市宗仲寺住職)

晩秋を告げる木枯は、足早に訪れる厳しい冬の鼓動をひたひたと伝える響きをもっています。あのダイナミックな風と樹々の織りなすざわめきに、私はいつも底知れず心ひかれるものを感じます。寒気の漂う青白い月明りのしじまは、心身の一つにし、冬の夜長を心の内面に向って散策を始める絶妙な季節だと思えるからです。

生きることの苦しみは、人それぞれによって異なるでしょうが、究極には生きることの意味を深めようとするために生じる悩みに共通するように思います。

私は、最近、テレビなどの宣伝にあるような面白おかしい人生の在り方や、ゲームウオ

ツチ等の機械が氾濫する日常生活の風潮に、進歩を目指す時代の前途を阻む一種の危機の念を禁じ得ません。こうした基盤から、思考力に乏しい子供が育ち、そのまま大人へと移行する現象もあながち不思議なこととは思えません。

思索することを忘れた心の貧しさが、社会悪を次々と誘発しているのではないでしょうか。考え方の拡大や深化は、思索から始まり、これは、必ずしも肯定的な見方ではなく、「何ぞ必しも」という既成概念に対する疑いの余地が生じて来ることは必至でしょう。近世哲学の祖・デカルトは、一切を疑ったのち、疑いえぬ真理の基準として考える自己を発見し「我思う、故に我あり」を深い思索から得ました。この言葉に、明らかに「考えるわたし」の高らかな主張であり、あらゆるものに疑いの目を向けた積極的な人生に挑んだ姿勢を感じさせます。

私は、職業柄よく京都を訪ねる機会がありますが、ふとしたことから、梶川芳友氏の「何必館」という一風変わった名の美術館のあることを知り訪ねてみました。梶川氏は、空間に向けた芸術性を独得な哲学によって着目され、永年の念願であった美術館を実現されました。形あるものとして具現されたその館の見事さは言うまでもなく素晴らしいと思いますが、私は、その命名の動機に深い関心を抱きました。

誰にも生涯を決定するふしぎな邂逅というのがある。私と村上華岳との場合がそれである。昭和三十八年、当時、画商になるための修業中であったが、画商とは何であろっか、という疑問にぶつかり、解決しあぐねて、いっそ、やめてしまおうか、とさえ思っていた頃である。

近代美術館京都分館で、村上華岳展が開催され、百数十点の作品が展示されていた。出品されていた中の一点で「太子樹下禪那」という作品の前に立った時、これまで体験したことのない、身ぶるいするほどの衝撃的な感動を受けた。

それは絵が巧いとか、色が美しいとかいうものとは違って、こうゆう人が、この世の中にいたかという驚きであった。

そしてその絵の前から立ち去りがたく、いくども引き返し見入っていた。閉館が間近になった頃、この絵に向って合掌している姿が、遠くから見えた。絵に対する感動か、ただ仏画としてであったかは知らないが、印象的な光景で、いまなお忘れがたい。

私は、この一点の作品によって、自分の生涯を美術のことにかけようと決心した。まさしく、私にとっては、運命的な邂逅だったとしか、いいようがない。

そして、そのとき、この作品は自分のものになるのではないか、という妙な予感と、この作品が傍にあれば、安心して死ねるという思いを持った。どうして、そのようなことを考えたのか、いまもってわからない。

しかし、それは、いいかえれば、私に、いかに死ぬべきか、ということをし、黙示しているように思われてならなかった。

このような情熱に立脚した梶川氏の言葉に力強い人生への姿勢が示されていると思います。インドの尼蓮禪河畔、菩提樹の下で、坐禅修業する若き太子を描いたこの作品に接した梶川氏は、死は厭世的なものではなく、むしろ逆に、死を考えることによって如何に生きるべきかをはっきりと自覚されました。

この事象から、生きる意味の悩み、疑問から発した魂の模索こそ、思いがけない感動の歓びに出合えるのだという確信を得ました。私どもは、とかく現代のマスプロの潮流に流され易く、高度な本質を内芸する対象に素通りする傾向にあります。世間的な評価や通弊を第一義とするために生じる矛盾が各所に現れているように思えます。このことに関して、私にも大変、係わりの深いお二人の巨匠が語られた言葉に、心に留め置かなければならない人生の表と裏の実相を感じています。

先日、東京・駒込にあります文化座で作家・水上勉氏書き下しの「石よ哭け」という劇が上演されました。それを紹介するテレビにご出演の水上氏は、アナウンサーとの対話の中で「先生は、よく戯曲を書かれますね」という質問に、「私は、小説が下手でね、思っていることをそのまま表に出して書いてしまうものですから……。書きたいおもいを裏に入れておかないと良い作品とは言えませんかね。小説に比べて芝居の方は、考えをセリフに直せるから、書きやすいのです」と言われました。天下の大作家が、自分の作品に対して「下手でね」と謙虚に直言されているその言葉に思わず感動いたしました。

そして又、今年度の文化功労者の栄誉を受けられました彫刻家・山本豊市氏を東京・下落合のご自宅に表賀の為、訪れた際に、「最近の若い彫刻家は、外に現れる部分にその制作のポイントを置きやすいが、彫刻というものは、目に見えない部分、特に心棒になる一握りの粘土に心を注がねばなりません。その見えないところの積み重ねが、やがては、内面からにじみ出る外面の美しさを創るのです」と語られました。

私ども、仏教徒にとりまして厳寒期を迎えるこの季節は、あの劇的な釈尊の正覺の暁朝を想起する時期とも重なってきます。

釈尊が、仏陀・悟りの人となられるまでの道程には、生きるための根源に横たわる問題について深く悩まれたということに、私はいつも新鮮さを感じ、大きな意義を抱きます。富有の極みにある生活の中にありながら、単なる世俗の王となることに幾多の疑問を持たれ、その疑問ゆえに得られた万人への救いが生じた意味は、常に遠大であり新しいのです。美しい伝説に彩られた「四門出遊」こそ、生きることの厳肅な意味への画期的な問題解決の出発点であったことを改めて感じています。

しかし、釈尊が六年間の難行苦行の末に得られたものは、意外にも、苦行のみで、本懐とする問題解決となり得ない無意味さの認識でした。そして、ついに、あの大悟に到る道は、村娘の差し出した牛乳が、ゆで体力を回復され、その後に行われた菩提樹下での黙想生活からでした。

釈尊の説かれる「中道」を大切に感ずることのできる人は、表と裏の意味合いをよく熟知している方だと思います。柔軟心は両極端の激しさにも耐え得る偉力を蔵しています。現在の世の中から次第に、この柔軟性、心の耕しが消えつつあり、表面だけを整えている傾向から、人間生活のトラブルは尽きません。自分自身の力で中道を見出すためには、表の大切さの裏づけとなっている裏面の真相に気づかなければなりません。他者の定めた枠にこだわることなく、勇気をもって、あらゆる側面を重視してみるのが問題解決への道だと信じます。

月影のいたる、この身も引きしまる向寒の期に、釈尊の成道に思いをはせながら、表と裏との融合に必要な「考えるわたし」の意味を静かに味わう幸せは、又格別のように思います。

(ず)
(い)
(そ)
(う)

京都岡崎・吉田界隈 (二)



みめ覚めの鐘は知恩院聖護院
起きて見給へ紫の水

—— 晶子

新婚の愛妻晶子に、自分の生れ故郷を見せておこ
うと与謝野鉄幹(寛)が、その古里岡崎の地を訪れた
のは明治の初め、いつの頃であつたらうか。

戸と
川がわ
霊れい
俊しゅん

晶子の歌は、その時ふたりが泊った南禅寺蹴上げ
のあたりにあつた旅宿で作られたと伝えられてい
る。知恩院は程近く、明けの鐘は聞けたであらう
が、山伏の、今の修験宗本山聖護院には鐘はない。
しかし知恩院聖護院とつづく語呂は、如何にも京都
の門跡寺院の醸し出す雰囲気を伝えて余蘊が無いよ
うに、歌に素人の私にも感じられる。

この歌の碑は、その旅宿のあったあたりに後年建てられた、今の都ホテルの裏山の庭園にひっそりと訪う人を待っている。

都ホテルから北を眺めると、少し離れて四明ヶ嶽、近くに如意ヶ嶽を右にして、真如堂、黒谷の古塔のただずまいの美しい栗原ヶ岡の、その真下の麓に在る岡崎神社の直ぐ前が与謝野寛の生れたところと伝えられる。そこは今では、岡崎中学のキャンパスとなつて、毎日、若い生徒たちの嬉々とたわむれる声ににぎわしいが、そこに明治の初めまで西本願寺末の巖乗寺という寺があつた。その寺の住職与謝野靈巖の長男に生れたのが寛であつた。

新しい時世に後れまいと、いろいろの事業に進取的であつた靈巖であるが、遂に失敗に終り寺財は蕩尽され、寺は遂にその寺籍を本山に預けて廃寺となる。そして寺の古文書類は親戚の山口県徳山のもの、これも廃仏棄釈と闘つた明治の傑僧赤松蓮城のもとに預けられることとなる。この赤松姓からは、後年、宗教学の赤松智城博士、初期の無産政党の政治家赤松克麿、赤松五百麿、そして社会党の参議院議員赤

松常子女史らきょうだいが出て、西本願寺派の名門とされる。

こうした与謝野鉄幹(寛)の年譜の「京都岡崎の産」ということは、ずっと後年になつて私の大学の頃、明星派の短歌に心を寄せていた学友から教えられてであつた。

小学校の先生——私の学んだ小学校は錦林小学校という——も教えてくれなかつた。

「与謝野鉄幹という大歌人は、われわれの錦林小学校の極初期の、在校生だったんだよ」と、同窓の先輩を誇りに教えてくれたその友も、今は、もういない。

しかし、亡き友の教えてくれたおかげで、私は、岡崎神社のあたりを訪れる毎に、このあたりにあつた巖乗寺という古刹のただずまいを想像し、そこに私と同じように寺の子として生れた歌人與謝野鉄幹(寛)に、ひとときわ親しみを抱いてなつかしむのである。

その寺の斜め筋向いに、御坊^{ごぼう}さんの呼称で土地の人に親しまれる親鸞聖人の若き日の草庵あと、今の

岡崎別院がある。弟子親鸞は、そこから日々、師法然上人の白河禅房、いまの黒谷に通うて提撕を受けたと言われる。そして聖人が自らをその水に映して、おのが姿を絵にしたという、鏡の池が今も枯れないで凝然と千古の深さを湛えている。

私が少年の日、はじめて仏教の日曜学校というものに昵んだのは、この岡崎別院であった。毎週通ってくる日曜学校の先生達は、みんな大谷大学の学生であったようだ。

その頃、窮屈な小学校生活に容易になじめなかった私にとって、童話と讃仏歌だけの、そして、男の子と女の子も一緒に、毎週一回の日曜学校は楽しくも、又待遠しいものであった。男の子と女の子が一緒くた、というのは、その頃の私たちの通う錦林小学校は、その頃でも珍らしく男子は男子だけの、女子は女子だけの、それぞれ一千余りの生徒数の別々の学校であったからである。

私が、別院の日曜学校に親しんだのは、他にそんな集いがなかったせいでもあるし、門徒宗の寺の生れで、嫁いでも別院の婦人法話会——今は大谷

婦人会というのであろう——の一員で、別院の毎月のお講を欠かしたことの無い母方の祖母の誘いであつたかも知れない。

別院の前を歩き過ぎるだけで、久しく御堂おみどうを拝したことの無い今の私であるが、さほど大きくないが、親鸞聖人がみ姿を映し見られたと日曜学校の先生から教えられた、あの「鏡ヶ池」は、今はどんなであらうかとふと思う。以前には京都大学に学ぶ真宗寺院子弟の親睦の「鏡池会」の開催の看板が時々見受けられたこともあるが、「鏡ヶ池」とは人間の自己研鑽を意味して、親鸞の跡を往く学徒に、厳しく見直しを迫る言葉なのかも知れない。

黒谷の師法然上人と、池に自らを映し自らの身も心も整えてその麓の草庵から師の許に通う弟子親鸞と、師弟の間の情理を思いながら、行きすぎると別院の境内から大谷専修学院の学生たちの若々しい「恩徳讀」の声が、高らかに聞こえてくる。この専修学院も、やがて山科に移ると岡崎御坊のあたりもひととき寂しさを増すことであらう。

このあたりから数歩にして、丁度、平安神宮の神

苑の東北隅あたりの一角に、聖公会の古びた赤練瓦造りの十字架の聖堂が佇立している。正式の名称はマリア教会であるけれども、私達はこの教会堂が明治の中期に建営された時の司祭の名をそのままに、カスバート、カスバートと呼び馴らされてきた。

明治維新のあと、切支丹の禁制が解かれて、各地に教会堂が建立されるとき、封建の残滓のたゆとうそここでは、いわれなき反対の火の手が上ったことを聞くのであるが、ここ古い都の、岡崎の地では、都を東京に遷されて火の消えるような谷間に、新しい時代への炬火として新しい宗教の殿堂の建設は快くも迎え入れられた。

このあたりは、古くから一条家の所領の地であったが、明治になってからは、その代官が地主となつて広大な土地を所有することとなった。この土地の所有者には快くアングリカンチャーチに聖堂の地を捧げたという。

昭和の即位の大典の時、使節として来朝された英国皇太子が、京都滞在中に朝のミサに参じられたのもこの教会堂であつたし、その以前であつたらうか

コンノート殿下という皇帝名代がマリア教会に訪れた時には、小学生たちが英国旗の手旗を振つて堵列して出迎えたのもかすかな記憶に残る。早くから教会に付設されて、京都でも最も古い幼稚園の一つであるマリア幼稚園には、時の流れのうちに親から子へ、子から孫へと三代、四代とうち続く卒園者の家庭は数多い。

赤練瓦のしっとりとした堂の建物にまわりつく蔭かずら、幼な子を抱いた聖母マリアの美しい絵柄のステンドグラスに茜さす夕陽は、殊に印象ふかいものがある。

栗原ヶ岡の岡の辺に、神社と寺と教会との渾然と融けあつて醸し出す穏やかな宗教的な雰囲気は、私のふるさと岡崎の、他と異なる独特のそれである。

栗原ヶ岡——この岡の名称は、今では、辛く地名辞書に見うけられるくらいで、殆んど今日の人には知られない。岡の上に立つ浄土宗の大本山金戒光明寺の開祖法然上人のゆかりで、上人の比叡での修学の地、黒谷の名を、ここに移して、いつの頃からか「黒谷山」「黒谷さん」の通り名で、庶民には知ら

れ親しまれてきた。

山州名跡誌では、栗原ヶ岡の名で、往昔は、豊公花見の宴の醍醐に比敵するくらいいの、そのかみの花の名所であったことが教えられる。

京の古陶に、早くに廃窯になったが栗原焼というのがある。栗原、栗田、清水と東山沿いに一つの線となつて続くこのあたりの土は、素晴らしい陶器を生んだ。木米、道八を生んだ栗田焼も今は亡びたが、それより先に栗原焼は絶えて、今は京焼の名で清水焼が盛んである。

私のところにたつた一つ、烏丸大納言の箱書きで、尾形周平銘の茶盃が残されている。

尾形周平は栗田の名陶工と伝えられているけれども、彼の銘の入った栗原焼は珍らしい。

去年、陶器の古書を辿つた地方の知友の紹介で、さる地方の宗匠が、土を求めてやってこられたことがあつた。私は、あて途もなく、「ここを掘つてみられたら？」と、裏の竹藪のあたりを案内した。その土が栗原焼にふさわしい土であつたのであるか。後日、自ら焼かれた茶盃を送られてきたの

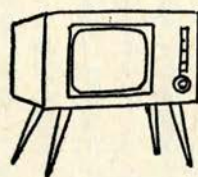
を、私は今に新しく甦つた栗原焼として、時折り、独り茶を楽しむがとっている。

むかし神楽ヶ岡から栗原ヶ岡にかけては、幾つもの窯があつたらしい。しかし、栗原ヶ岡のあたりに廃窯の遺跡を見ないので、或いは栗原ヶ岡の土を使って神楽ヶ岡の窯で焼かれたものが栗原焼の名で通用されたのかも知れない。

栗原ヶ岡に並ぶ神楽ヶ岡——ここには太平記によると神楽岡城があつたと言う。そして明治維新の戊辰戦争の時には、黒谷に駐屯する会津軍を征討するための隊長相良四郎率いる薩軍の砲撃陣地の構築された砦となつたという。しかし、そういう血なまぐさい事蹟よりも、もともと神楽ヶ岡は、その名の示すように、古来の伝説によれば、神の集います聖地であつた。その聖地に、都が奈良から京都に遷ると藤原氏は春日大社を、この岡にうつしたのが今の吉田神社とされる。それから岡は、吉田山で有名となる。

今日も、晩秋の日を浴びて、神苑には鹿が戯れ、猿沢の池には落葉が漂うている。

(つづく)



文書伝道のあれこれ

あお やぎ りょう がん
青 柳 良 巖

(福島県桑折町大安寺住職)

はじめに——雑誌『浄土』の編集室から投稿を依頼されたので、読者のひとりとして、不敏をも省みず「我が文書伝道のあれこれ」と題して寺報の中からその実践の二・三を報告し、ご批判とご教導を仰ぐ次第である。

提言

——ただ一向に念仏すべし——

(昭和52年春季号)

宗祖法然上人のご命日は一月二十五日でそ

の法要は総本山では、昔は寒さのきびしい正月十九日から二十五日まで七日間つとめられました。が、明治の頃から厳寒期をさけ、遠くからの参詣者の便をはかって花の四月に改まり現在にいたっています。

私も昭和十二年三月から四月にかけて約一ヶ月間知恩院での生活を送りましたが、その頃でさえ比叡おろしの冷たさが身にこたえました。とにかく京都の冬から春先にかけての寒さは格別のです。

さて、今回は御忌に因んで法然上人の「一枚起請文」について、考えてみたいと思います。

このご法語は、御往生の二日前にお弟子の勢観房源智上人にお渡しなされたものといわれています。

法然上人は法難のち建暦元年十一月二十日、四国から摂津の国に住まれ、帰洛を許されてからご健康がすぐれず、翌年正月二日頃から病床に臥されました。

それにしても八十歳でお亡くなりになる二日前にこれだけのものをお書き残しになるということは、それだけでも大変な氣力の持主でいられることに驚かされます。

私は昨年の春、有縁のある方から次のようなお手紙を頂戴いたしました。

「法然上人の一枚起請文を読むと何時も素晴らしいなあと思う。南無阿弥陀仏を称え続ける時、自然に渾然と仏と一体となり一大妙音となり大音声となって、この世に極楽浄土が

開けるだろう。南無阿弥陀仏は永遠の仏の生命への帰一であり讃歌だからだ」。(原文のま

ま)
私はこのお手紙を拝見してなんともいわれぬ感激を覚ええました。私などの到底及びもつかない程の深い受け取り方をされていられるのに心を打たれました。

宗教は我が身に引きあてて考えなければ生きてきません。道理は普遍であってもそれを受けとる器はいつも自分自身でなければなりません。宗教は個の世界のものだといわれる所以もここにあるわけです。

このご法語の口語訳はいずれ後日に譲ることにいたしますが、注目したいのは「ただ一向に」というおことばでその意味は「ただひたすらに」ということですが、一見なんでもないようですが、私はこのことばをよく味わってみるべきだと思います。

禅門ではよく「只管打坐」ということをいいます。「ただひたすらに坐禅せよ」という

意味で、坐禅して仏になるなどと思わず「ただ坐仏になり切れ」というのです。即ち唯黙々と坐ることによって釈尊に脈を通じ、釈尊の悟りに感応道交できると説いています。

高浜虚子も「年はただもくもくとしてゆくのみぞ」と詠んでいます、このことばにこめられた作者の心情はほんとうに深遠なもののように感じられてきます。

法然上人や道元禅師がいわれたこれらのことばの意味するものは、人間のはからいを超えて他力的に自然法爾にそうなつてゆく、自己のはからいのないことのようにです。ことばをかえていえば帰依とも随順ともいっていいかもしれません。我なく物なき一如の世界をいっているのだと思われまふ。

法然上人のお示しなされた「一枚起請文」には大きな力（阿弥陀様）の前にただひれふして念仏すべしとあかされているのです。

私達浄土宗の信者は、法然上人がお示し下さった御心を素直に受け取り、「智者の振舞

をせずしてただ一向に念仏すべし」を我が心にいいきかせ念仏行に精進したいものだと思います。

「自然法爾の風光」とか「無碍の一道」とかいわれる世界は、「ただ一向に」念仏してゆくところに開けてくる、明るく広々とした世界であることに心を向けたと思います。

・参禅は身心脱落なり。只管打坐して求め得たり。

・人間の生き方の本質というのは、他力の中に生きていくということです。

随想

―縁あればこそ―（昭和56年新春号）

十月の末に大本山増上寺に所用があつて上京した。開会が夕方の四時からであつたので、会が終つたのも遅く、又偶々、たまたま聖書道場が開設中であり、教区からも七人の方が入行中であつたので、お会いして元気なお顔も拝見したいと思ひ、その晩は増上寺会館にご厄

介になることにした。

翌朝、梵鐘の音で目を覚し、大殿に参拝し終えて食堂に入ったら、朝の作務を終えた学衆の一群がテーブルの一角に陣取り食作法を唱えて食事を撰^{えら}っていた。

あの広い食堂には私を含めて十人足らずの人々だけだった。落ち着いて食事が出来たのもありがたいことの一つであった。

食事を終え、立ち去り際に、ふと食堂の壁に目を移すと「縁あればこそ、親子となり、夫婦となる」という掲示文書が、私の眼をとらえた。「縁あればこそ、親子となり、夫婦となる」なるほどと私は思った。それは誰が考えたことばなのか、例の如く仏具店あたりから寄贈された広告なのかもしれない。がしかしそんな詮索は別にして、これはいいことばだと私は思った。そして、忘れまいとしてその場で紙片にそのことばを書きとめた。

縁あればこそ私達は人としてこの世に生を享けてきたのである。直接的には両親の愛を

因として、更には多くものの縁^{よち}の力によってこの世に生れてきたのである。

心しずかに今の自分の存在を考えみる時、私達は改めて縁の不思議さ、偉大さに気付かされるのである。

毎日のように新聞紙上に報道されるニュースの中に、余りにも生命^{いのち}をそまつにする暗い記事のなんと多いことか！拾いあげればきりがないが、両親を撲殺したショッキングな事件をはじめとして、相つぐ母子心中、受験生活に疲れた中学生の自殺等々……。

私達はずっと心を落ち着けて、自分を取りまく目に見えない大きな力に支えられている自分というものに心を向け、不思議な因縁によって与えられた人としての生命^{いのち}の尊さに気付かねばならない。

もともと弱い存在の人間ではあるが、己に負けることなく精いっぱい^{いっぴや}の生き方を心に誓い、生かされている縁のありがたさに応える生涯を送りたいと思うのである。

エッセイ

卒業式前後

(四)

—セントルイスへ—



朝食が済んでから一番忙しかったのは、娘のひろみであった。卒業式に出席してくれた先輩後輩に電話して、別れの挨拶をしなければならなかったからである。

七八年卒業のB・J・(日本名、美里嬢。おそらくひろみが名付けたものであろう)。軍隊経験を持つ女性で、ひろみより遙かに年上である。来年卒業予定のベニー。卒業式の昨夜、自宅のディナーに招待してくれた子で、当日はお母さんと婚約者と共に式に出席してくれた。同じく来年卒業見込みのコーリンは父親

きの
木 下 隆 一
した りゅう いち

(随筆家)

と一緒に小型機を駆って、インディアナポリスから来てくれた。

「交通情報を聞くと、かなり渋滞が激しいようなのでね」

かつての朝鮮戦争の勇士は、言葉少なにそう言った。戦闘機乗りにしてみれば、セスナ機の操縦などお手のものかも知れないが、さすがアメリカと感心したものだった。自家用機だかレンタル機だかは聞きもらしたが、都市の周辺には、小型機専用の飛行場が幾つもあるのである。狭い日本では到底考えられな

いことである。デイトンの空港へ、ひろみと一緒に私たちを出迎えてくれたキャロルも来年卒業予定で、数学の教師が志望とか。

「どうしてアメリカの女の子は朝寝坊なのかなあ」

なかなか出ない電話に、出発時間が迫って来ているので、ひろみはいらだちを隠そうとはしなかった。

「なに言ってるんだ。お前だって、日本へ帰って来れば遅くまで寝てるじゃないか」

「……」

充分に睡眠がとれるということは若者の特権には違いないが、私がひろみの年には既に勤めていたから、睡眠は許されなかった。

ホストファミリーのボトルフ家は、すぐに出了たようであつた。ホストファミリーというのは、あらかじめ申込みを受けた家庭の中から選んで、外国人留学生のために学校が斡旋してくれる家族のことである。留学生は年に何度か招かれてご馳走になったり、悩み事の

相談に乗ってもらったりする。いわゆるボランティア活動の一つである。以前私たちが訪れた時一晩お世話になったことがあるが、その時ヨチヨチ歩きをしていた長女が七歳になつており、生れて六カ月になる弟の世話を盛んにやいていた。この家族には大学の食堂のディナーで逢つた。相変らずお若いと言うと、奥さんは嬉しそうに笑つた。もつとも、夫妻ともまだ三十代であるが……。

「アンには電話しないのか」

ハワイ出身の日系四世のアンは七八年に卒業したが、同じハワイ日系四世の医大生と結婚して、いまはインディアナポリスで幼稚園の先生をしている。卒業式の前日逢つた時、

「彼、もうすぐインターンが終るの」

と、旦那さんを紹介してくれたが、物静かな青年はあまり多くは語らなかつた。

「アンにはゆうべ電話して、インディアナポリスの空港で逢うことにしたの。コーナーズ・プレーリを案内してくれるそうよ」

○
インディアナポリスの空港へは、例によつてイエガー氏に送ってもらつた。娘のベッキも一緒だったが、決して父親に代つて運転しようとはしない。娘には全くその気がないし、父親の方にもさせる気はないようだ。確かに老いを感じさせぬハンドル捌きだが。

TWAのカウンターまで荷物を運んでくると、イエガー氏親子は再会を約して帰つて行つた。殆ど入れ違いにアンがやつて来た。赤い野球帽を被つた小柄なアンは、背後姿を見る限りでは全く少年そのものであった。

「荷物沢山あるって聞いてたので、ワゴン持つて来たんだけど、カウンターで預つてくれてよかつたわね。じゃあ、行きましようか」と、アンは乗車を促した。

市街を抜けて、車は大きな邸宅の立ち並ぶ一画にはいつて行つた。鬱蒼たる森の中の古色蒼然とした建物は、いかにも時代を感じる

が、庭園の手入れは行き届いている。住宅が別荘か、そのあたりは判然としないが、ハリウッドのビバリーヒルズのチャカチャカした邸宅より余程私には好ましく見えた。川沿いの道を更に進む。

「なんだか京都に似た雰囲気——」

女房が呟く。そう言われれば、そんな感じがしないでもない。

コーナーズ・ブレイリというのは、一八三六年頃開かれた個人農場の建物を博物館的に保存した物で、当時の服装をした人たちが、当時の器物を使って生活している様子を、入場者に見せてくれるのである。約百五十年前のアメリカの農場ヘタイムスリップしたようで、奇異な感じであつた。

「私はここ二回目だけど、アンは？」

「私、三回目かな」

この博物館の開設に当つては、アーラム・カレッジの歴史学教室がいろいろ協力したとかで、アーラムの学生に限り学生割引がある

ので、学生たちはよく訪れるという。

農場主の館はそう大きくはないが瀟洒な洋館で、調度品も什器も外国製のなかなか凝った物を使っていたようである。二階へ上る階段の踊り場に掛っている時計も見事な物で、正確に時を刻んでいた。裏階段を降りると台所へ出る。ここでは三人の美少女がパンを焼いたり、馬鈴薯の皮を剥いたりしていた。

ここで働いている人々は皆アルバイトということだが、医者や看護婦は看護婦の、教師は教師のキャラクターを備えているのも楽しい眺めであった。皆それぞれに大変な役者である。

敷地内の小舎を見て歩く。礼拝堂と病院、学校がやまやかな建物と云えるが、他はまるで掘建小舎である。梁や柱は頑丈な木材を使っているが、壁は土を叩きつけた荒壁で、気休めのように漆喰が塗りつけてあるだけで隙間だらけである。さぞ冬は隙間風が厳しかったことであろう。

窯場では雑器を焼いていたが、日本の登り窯に似た造りで懐かしかった。鍛冶小舎もあるし、木工場もある。ここではそれぞれ専門家が作業していた。

病院の建物は白ペンキ塗りで、待合室では老嬢が三、四人お喋りしながらお茶を飲んでゐた。病院の待合室は、当時はサロンの役目を果していたのかも知れない。

学校の教室の内部は簡素なものであった。丸太を半分に割ったのに脚を四本つけた長椅子が十数本置かれているだけで、生徒の机はない。私たちがはいつて行くと、教師然とした青年が出て来て、アメリカの歴史について話してくれた。壁に貼ってある、州の数を表わす星が二十四個ついた星条旗が印象的だった。おそらく准州も含めての数だろうと思うが、アメリカ合衆国の版図はその当時僅かに二十四州しかなかったのである。現在の半分以下である。

その他点在する小舎は農夫たちの住居であ

ろう。どの小舎でも主婦や娘が機を織ったり、糸繰り車を廻して糸を紡いでいた。その背後では煖炉があかあかと燃え、葉缶か鍋が湯気を上げていた。料理のための竈も兼ねているらしかった。教室以外のどの小舎にも、必ず銃が壁に架かっていたのも印象的だった。自衛手段としては自ら鎧う以外に方法がなかったに違いない。

アンとは空港のレストランで食事をして別れた。

「アン、早く赤ちゃんの写真送ってね」

「ひろみこそ、早くお嫁さんの写真見せて」

「二、三年無理かな」

「私の方も……。彼の身分が保証されるまでは、私も頑張らなくちゃ」

「お互いに頑張らましょ。旦那さまにくれぐれもよろしくね」

そんな軽口を叩きながら、娘たちは抱き合って別れを惜しんでいた。

セントルイス行の飛行機は三十分程出発が

遅れた。搭乗機は既に待機しているが、なかなか搭乗許可が降らない。でも、私は満足だった。最新鋭のボーイング B-767 だったからである。あまり飛行機に興味を示さぬ娘に、「見ろ、運がよかったぞ、767 だ。胴体の一部は日本製だぞ」

「乗り心地いいかしら？」

「いいに決っている。なにしろ最新鋭機だ」

外観も座席配置も、ヨーロッパ製のエアバス A-300 に実によく似ているが、荷物の収納庫はワンタッチで開閉するなど、工夫が見られた。一つ閉口したのは、トイレの水を流すたびに、ブザーが大きな音で鳴ることであった。後部の座席だったので、その音は一層よく響いた。はじめは何の音か見当がつかなかったが、自分で試してみても納得した。昼間の短距離の旅なら我慢出来ないことはないが、夜間の長距離飛行では、かなり気になることであろう。度々響くブザーを聞き、禁煙席に坐らされて無聊をかこっている間に、い

つか飛行機は着陸態勢にはいつていた。

「そろそろ、ベルトを締めろよ」

「もう着くんですか?」

「飛行時間は僅か四十分だ。下を見てみろよ、ミッシッピーが見えてるはずだ」

例によって窓側の座を占めている女房は、

「あら、ほんと。ひろみちゃん見てごらん」

「見てごらんたって、ママの帽子が邪魔して、私たちにはなんにも見えないのよ」

ところろしていたところを起こされて、ひろみは不機嫌だった。

「まあ、そう言うな。お母さんはあれだけが

楽しみで飛行機に乗っているんだから。ごゆっくりご堪能下さいな、ぐらい言ってやんなさい」

シートベルト着用のランプがついた。

飛行機は大きく左へ旋回して、ますます降

下角度を深めて行った。セントルイス空港まで、あと八分。

(続)

長田芳一画 五雨みなこ文

絵本 ほうねんさま

B 6変型判／定価三〇〇円

右近れい子画 福嶋智蒼編

絵本 おじぞうさま

B 6判／七二頁／定価四〇〇円

仏教まんが・教育図書

◎子供たちのやさしく、すこやかな成長を願

って、大人たちからのすばらしいプレゼン

トにご利用下さい。

大 道 社

東京都千代田区飯田橋一―十一―六

電話〇三(二六二)五九四四 東京一―八二四七

二 歌声の時代に対応二

老・若・感謝の姉妹歌

吉^{よし}田^だ光^{こう}覚^{かく}

私は四年前、初めて地域の敬老会に出席した。毎年招待を受けてはいたが、いつもお盆中の多忙な時期に開催するので、欠席の方へ〇をつけていたのである。でも、その年は丁度、年齢が七十歳、正客に該当するので、ぜひにと言われ、一時間だけ顔を出してみた。開会の辞、主催者挨拶、来賓、来賓祝辞と型の如く三十分程費して、婦人会員の慰安演芸へと移った。

一般の老人方は、飲む程に、酔うほどにお家芸がぼつぼつと出始めたものではあったが、私は何か一つ物足りなさを感じたのである。そうだ。一同合唱がない。戦前の

四大節には式歌があったように、こうした催しには、高齢を讚美する若者の歌があってもよいではなからうか。一つ作詩してみようと心に決めて中座した。翌年は仕事に追われて忘れていたが、一昨年春、ふと思ひ出してまとめてみた。

敬老の歌

一、この世に宝^{たから}かずあれど
生命^{いのち}にまさるものはなし



長き憂き世を生きぬきて
われらを愛しはぐくめる
年寄方よ ありがとう（繰り返す）

二、先祖のバトン受継ぎて
雨、風、波を耐えしのぎ
わが家この郷まもりきし
積る経験談をきかせかし
みなさん、どうも有難う（繰り返す）

三、あなたの歩み慕いつつ
強く正しく生きるわれ
ともに天寿の尽きるまで
この世の幸をいただかん
みなさん ほんとに有難う（繰り返す）

曲は、幸い檀家に岩手大学音楽教授の鷹嘴洋一先生が
居られるので、いつも乍ら奉仕的に作曲して頂いた。そ
して地元の高校にお願いしてカセットに吹込んで貰い、
二十人程で大正琴のグループが部落に居るので、寺で演

奏して貰って録音した。加えて岩手教区長小川金英師の
法話と、作詩の心をテープに納めて表裏を埋めた。岩手
日報でも大きく紹介したので、IBCやテレビ岩手両局
から招かれて放映、一方、中外と文化時報にも掲載して
貰ったので全国各県から数人宛のカセットの注文を頂い
たが、総体的には微々たるものである。浄土宗報でも報
道下さったが、青少年教化のイミでもぜひ普及して頂
きたい念願である。

◎返礼歌の作曲募集

敬老の歌を、老人の歌と誤解している方もあるが、若
者が老人へ捧げる感謝の歌である。そこで、片手落と思
い、今度は、若い方々へ応えるイミで、老人側から返礼
の歌詞をまとめて見た。

若者へ感謝の歌

一、わが子よ孫よ嫁さんよ
不思議な縁でわが家に

よくぞ生れて下さった
よくぞ嫁いで下さった
ほんとにどうも有難う

二、頭もわるく富もなく

飛ばされ通しの俺等だが
真面目に生きた積りです
あとは宜しく頼みます
ほんとにどうも有難う

三、寄る年波に理想うすれ

みんなの仕合せ祈るのみ
仲よく確と、手を結び
わが家この里守れかし
ほんとにどうも有難う

この歌の曲を、今度は六十歳以上の方々に作曲して頂
きたい。音楽に御堪能な宗門の方に、ぜひお願いした
い。

昨今、核家族と言われ、親子の断絶離反は現代のガン
である。私共はかかる病弊を信仰によって一掃してあげ
ねばならぬ。勿体なさを知らず、知恩報恩の精神が失せ
去り、暴力学生が跋扈し、親を親とも思わぬ青年子女が
横行する——かかる世相への処方箋に、一服の清涼剤と
して私は、若者の歌声にマッチさせて、老若感謝の姉妹
歌を送りたいと思う。老若両者から、有難うの声が出た
ら往生安楽国である。大方の共感を頂ければ幸甚であ
る。

この拙文を目に触れた方々は、檀信徒、友人知人の音
楽家に紹介の労を恵んで頂きたい。

〒028—34 岩手県紫沼郡紫沼町弁沢48

極楽寺 吉田光覚宛

TEL (〇一九六) 七三—六八八一

◇◇◇ “浄土句集”欄への投句のお願い

— 及び俳文等の寄稿のお願い ◇◇◇

『浄土』誌本文中のオアシスともいうべき、“浄土句集”欄は、選者であるホトトギス同人一田牛畝先生の献身的なご尽力と、あわせて熱心な俳句を愛する会員諸兄に守られて、二ページながら情味と、季節味に富んだ味わい深い俳壇を作っています。心をこめて作句され、熱心にご投句される皆様方へ心から感謝させていただきます。

さて、この“浄土句集”欄へ、どうぞほかの同心の方々もできるだけ多くご投句していただくことをお願いし、また重ねて俳文や句会便り、あるいは俳句にまつわる折々の随想等をご投稿いただくことを、ここに衷心よりお願い申し上げます。

左記要領で、くれぐれも宜しく願います。

一、内 容 俳文、句会便り等の随想

一、枚 数 四百字詰用紙八枚半程度

一、締 切 毎月五日

法然上人鑽仰会

浄土句集

一田牛畝選

許 滝行者の合掌は堅い。直立不動の頭には滝が激しく落ちかぶっている姿は、誠に巖の如くである。

埼玉 佐藤 泰子

秋の石地藏の膝に積み上げて

親子孫三代出仕秋彼岸

福岡 行正一如子

厨の灯消せばかすかにちろろ鳴く

山形 松田 允子

評 親は九十三歳の老僧正、子は前福岡市博多区長の現住職、孫は大本山善導寺の役僧と、三人で秋彼岸を修行しているのは中々ねたましいもので、檀信徒大喜び。

評 灯を消すまでは気がつかなかったが、夜となり静かとなれば、鳴くちろろのかすかな鳴き声が聞えて来る。

京都 岩井 伏水

大楠の下句碑二つちろろ鳴く

熊本 石原 杏子

色鳥の木々に来楽し吾が狹庭

東京 真野よし子

評 狹庭に色鳥が来てくれた喜しいことだ。庭があることは、実に楽しい限りである。

評 秋の雨は淋しいものである。大書院ともなれば広々として暗いので、昼を灯しているのである。

無住寺の縁の下まで秋海棠

東京 真野よし子

評 大本山善導寺の五重相伝に参加し巨楠の下に、静雲、牛畝師弟の句碑が並び建てられている。そこにはちろろ虫が鳴いて、皆をよろこばしてくる。

滝行者巖の如く直立し

東京 末常てる子

高原の花野楽しく歩を伸す

東京 田中 秀代

山形 松田 光誉
濛だけを残す城跡ちちろ鳴く

福岡 服部 光代
魂祭若く逝きたる姉弟

山口 上野 明達
秋灯や海外アルバム整理する

三重 山田 歌甫
金木犀万葉人の夢の跡

福岡 荒牧 亀齡
退院の体をおして盆用意

福岡 上滝津弥音
石仏の古いたる赤苑秋日濃し

東京 猪瀬 幸子
村人の守る無住寺柿たわわ

福岡 権藤みきを
台風の過ぎし大空碧き哉

福岡 林 澄山
月祀るこころ神火を焚きもして

東京 小笠原香祥
露草の群遊歩道の一ところ

福岡 西村 元子
転居の荷最後は根分する牡丹

福岡 釈河野ねはん
曼珠沙華残して寺苑草を引く

山形 佐藤 縁石
十夜待つ寺苑の作務の一日かな

福岡 前田 秀峰
短日や夕餉の窓の早灯る

福岡 行正 明弘
秋彼岸水子地藏は濡れどうし

東京 細田 初枝
灯に集ふ浮塵子高野の坊泊り

福岡 安藤平次郎
紅芙蓉はや夕影のおよびけり

福岡 稲永美恵子
湯治宿禰切りすみし姑連れて

東京 吉田ゆきゑ
母傘寿童女にかえり初紅葉

大分 丹羽 難中
秋彼岸弥陀は真中まんだらに

福岡 木下富士女
寡婦となる娘を思ふ秋の夜

長野 友渕旋風子
昨日今日縞目模様は秋の雨

福井 深井 鉅士
誘われて念珠くり秋の誕生寺

男の子には羽子板市の纏買ふ 一田 牛畝

浄技



合ごう田だ微び雪せつ

(山口県防府市在住)

この度の「法然」劇は巡演で、上京せずとも近くで拝見可能と思っていたが、急遽手術等の為に欠礼。後、県二つ距てた遠地で達成。然し、残り座席が耕して天に至る段々畑頂点の如し。老の目には遙か舞台上の男女区別はついても、皆同じ顔にしか見えず。(こうした場合青い頃は、親切な道具係の方が椅子を下さり、舞台の袖で)そこで、若い袈裟姿の案内係氏達に習い恥外聞を忘れ、最前席に近い段式通路に腰をすえる。これも祝福すべき満員盛況故と思えば大いに有難

く嬉しい。

法然の梅之助か梅之助の法然か。殊にラストの法然・信空・親鸞・西阿弥・兼実の方々の顔作りから声調・演技すべて一心同体。

粗衣平等態度完璧の中村梅之助上人なればこそ、主役崇拜に止らず、貴重な感化描写プラスは如何？ お虎・茂右衛門夫婦間に、俗喧嘩から聖互助愛への百八十度転換場面と。

右夫婦が争いながら上手へ入る間隙までの演出が非常に丁寧。それを松虫鈴虫出家場面幕切れにも。女性にとり生命である黒髪を切る決意表現に「競伊勢物語」信夫女は本劇の安楽同様斬首されるのであるが、それを参考の髪なびかせは如何平櫛田中彫刻作「鏡獅子」の袴ひだしわに、写実を越えた抽象タッチある故に、効果を醸した様に。

お辞儀一つにも、男舞する上に所謂高貴人と交る身の白拍子に比し、媚を売る稼業の遊女は首筋の姿態に重点を、という差を歴然と。但しいづれもの奥底に、共々優しく美しい性善心を秘めながら。

これらの入魂を以てすれば、もっと楽に演技可能。複雑楽譜物であればある程、反って歌曲もうたい易い様に。

近頃まれな、溢れる熱気舞台であった。それは、商業意識を超越されていたからで、決して宗教劇だからではない。

こうした芸術に対する謙虚な舞台は小生の青い頃、老名優喜多村緑郎、曾我谷五郎、少しお若くて六世尾上菊五郎、ずっとお若くて梅之助氏の父君中村翫右衛門の諸氏に於て感銘。

結果的に考えれば、上人は覇者専横援助ともなる自慰忍耐説きで止められたにも関らず、不当な迫害を受けられた。

だが、現在は心臓空洞（太いというのは不当）の所謂英雄豪傑など不在。個人的には宗教、倫理に謙虚なビラミッドの方々に貧しい故に家内円満で「争いをしないというのが宗教の教えと聞いていますのに、如何して宗教戦争まで起るのでしょうか？」といういわゆる底辺に学んで頂きた度い——などと申す資格は我々に皆無。口では戦争は嫌だといひながら、残酷極まる新聞雑誌、テレビその他に有頂天、首ったけ。今度の有難い「法然」劇に、果して客寄せ可能？と危ぶまれたとさえ、伺った。

世界中の人間が法然上人同様、その父君の貴重なご遺訓に従い、人を憎まず恨まず。そして全人類否、地球を自業自得灰燼に帰せしめては、これ迄我々が生きるために多大な恩恵を受けてきた他の動物植物に申訳ない、とする全生類愛を。核その物よりも、核ごころへの反省こそ必須。

今日只今、上人が生きていられたら、如何遊ばすであろうか？

「縫る」から「立つ」へ。動物性を人間性との誤解より発する自我から、霊長人間らしい自制心への精進努力を。これ以外に「これからは力より愛を」までで足踏みしている論壇を進展させる道は無い。

ああこれはこの観劇感想の域を脱してしまっている。お詫申す。

「天帝に、恥づかしからずや、示威と馴合、ただそのみの、世界運営」
「主義者達よ、素っ裸となれ、モットーの、妄執過熱は、鈍刀をつくる」
「己のみ、愛し過ぎてぞ、起るなれ、国うちの紛糾、はた戦争も」

「野獸ならぬ、靈長人間の、生き甲斐も、物質・パン故、ゆがみ墮落す」
「幼児にのみ、人道を強制し、大人我われ、その逆行爲し、省みもせず」
「いかなる、事由ありとて、怖ろしく、避けたきものは、流血の沙汰」
「小欲にて、生命奪い合い、なすよりも、大欲にて、助け合い、成す意欲なきや」
「核国の、長も喜び、核を収む、世を挙げて、争い嫌いと、目覚めし暁」
「核戦に、人類滅亡は、自業自得、忘るな恩義、全生類の」
「朝夕に、祈り続くなり、犠牲者の、一にんなりとも、現れぬ世を」
「ひとりの友、ひとつの国よりも、世界びと、全生類を、一つ身と思う」
「国を保ち、地球を守るも、畢竟は、人の生命を、貴重となす事」
「いのちいのち、生きとし生ける、もののいのち、大あめつちに、輝けるいのち」
「建前への精進こそ、本音動物の、深奥に、人間の、本心蔽存」
「人を信ず、誠ごころは、人をして、信じられ得る、人物と成す」
「全世界、太陽の心に、うづめたし、わが国名は、日の本と書く」
「戦争を、当然となし、疑わず、否定なす世の、至らぬが不思議」

歴史とは、一部少数人の勝手放題の記録でなく、それによって大多数人が如何に生きたかの報告書であるべきだ。

◎『浄土』表紙版画絵販売についてのご案内

『浄土』誌の遅配が続いており、まことに申し訳ありません。

どうか今後また、『浄土』誌の充実のために、会員諸兄の皆さまの暖かいご支援とご高配を心よりお願い申し上げます。

好評の『浄土』誌表紙版画絵は、大西耕三先生のご好意を得て、豪華額縁に装丁して販売させていただいております。額縁代も含めて、金二五〇〇〇円というお求めやすいお値段で、季節観に溢れた芸術味豊かな版画掛物が購入できるわけです。どうぞ振替にてご注文願えれば幸いです。

また、大きさの方は、『浄土』表紙絵よりはずっと大きく、約20cm×30cm位の大きさですが、額縁の大きさでいえば30cm×50cm程の大変豪華な一幅となります。

なお限定販売のため、予定数に達しましたら、申し訳ありませんが、おことわりさせていただきます。しかし現在のところ、昨年度分、正月号から十二月号までの在庫も充分にありますので、ふるってご注文願えば幸いです。

(申し込み先) 〒102 東京都千代田区飯田橋一—二—六

法然上人鑽仰会 振替(東京) 八—八—二—八七

● 現代詩コーナー……

父 子 の 顔

満一歳 私の子供は男の子

仔犬のように柔かく

仔猫のように暖かい

よりやく覚えた アンヨは上手!!

一日中 動きまわって 飽きることはない

坂^{さか}
田^た
文^{ぶん}
三^{ぞう}

誰もがいう

……お父さんにそっくりね!!

頭の形がよく似てる

アゴの形も可愛らしい

……お父さんとそっくりね!!

瞳がやさしい

チョコンとついた鼻はペチャンコ

口は小さく 言葉はアーウーブー

額の具合は まさに私にそっくりだ

私は父の顔を受け継いだ

鏡の中には いつも父の顔を見る

自分で笑って 父の笑顔を想い出す

——今 赤ちゃんのやさらかな寝顔に

ふと想う 父の温顔

(仏)(教)(行)(事)(一)(年)

十二月の行事——仏名会

驚見定信
わしみじょうしん

十二月は年の終りである。師走は極月であり、仕極つともよばれる。一年間の総決算である。決算は支払いや煤払いばかりではない。心の決算も必要であった。除夜の鐘が、百八煩惱を払って、身心ともに清らかになったと感じるのも、こうした心意のあらわれによるものであるとみることができよう。

しかし、人びとはもう少し積極的に心を清めようと

した。それが悔過であり、仏名会であった。一年間の生活は、意図したにしろ、しないにしろ、多くの罪をつくってきたと考える。古代には罪はケガレによっていると考えられていた。それは、ハラ、わねばならなかった。禊をしてケガレを払い、罪のない清浄な身にもどるのである。しかし、ケガレがハラエるということは、身体的外面的なものと考えられていたからであ

る。人びとの精神の発展は、ケガレを内面化してとらえることもあった。つまりケガレを内面の問題としてうけとめるようになったのである。心のケガレ、を知ったといってもよい。一年の罪障をとりのぞくことは、心のケガレを除くことであり、仏教の言葉でいえば、懺悔をすることであった。

十二月の仏教行事の基本的なモチーフをケガレとその払浄、仏教の言葉でいえば、「懺悔」のうちにみていきたい。

〈ケガレとタブー〉

ケガレは穢れである。国語辞典を引くと、きたないこと、よごれるとある。つまり穢れとは不浄の状態をさしていることになる。ケガレの代表は死者である。イザナギがイザナミを訪ねて黄泉の国を訪問し、ようやく逃げかえって、「吾はいなしこめしこめき穢き^{きたな}国に到りて在りけり。故、御身の褻^{かみ}せむ」として褻^{かみ}祓えをしているのが原型である。死は最大のケガレであつ

た。現在でも葬送儀礼は多くの禁忌（タブー）、してはいけないことにかこまれている。穢れは伝染するものと考えられた。

葬儀のときの食事は普段とは別にカマドを作つて煮たきをする。大勢の人びとがより集まるから、別カマドを作つて調理をするわけではない。死者の家の火は忌火として避けられるのである。忌火の食事をとれば、その人にも忌が感染するのである。忌を感染させないために別にカマドをもうけたのである。また忌は場をも穢しているから、ここは穢れた場所だという標式が必要とされる。

この標が、「忌中」という札である。

死は穢れであつた。これと並んで大きなケガレには出産があつた。死が黒不浄であるのに対し、白不浄とよばれるものである。

出産がケガレであるのは、死につながる危険にみちたものだからである。それはさらに流血を伴うことによつて一層、ケガレタものとうけとめられてきた。出産に別小屋を設けたり、別火を用いて煮たきをするこ

とは広く行われていた。俗に、産小屋については、タヤ、フジョウゴヤ、ヨゴレヤとよばれてきたことに明らかである。

死と生とは最も大きなケガレとされてきた。そして、ケガレは「汚らしいものと混同される要素はあっても、本質的には異なるものだった」(宮田登)ようである。

つまり、「現代の不浄観は、汚ないとする感覚と、穢れているとする感覚から成り立っている」(宮田登)といわれる。きたないものとは何であろうか。例えば糞便、尿、精液、月終血、垢、髪、爪、吐いたつばきなどがあげられる。つまり人体から排泄されたものがケガレタモノである。

人類学者のE・リーチは、人間は自分を取りまく環境を命名して、無数のカテゴリーに分類する。そして分類されたものとの中間領域(名づけられぬもの)、つまり、分類体系からはずれたものがタブーの領域で

あるという。タブー(Taboo)とは、日本の言葉でいえば禁忌である。

つまり、忌とは神聖なるものに対する態度である。それには、積極的に身を淨めて神に奉仕する側面と、穢れを避けて、清らかさを保持するための、忌避、排除の側面とがあった。具体的には、戒慎としての齋みと、禁制としての忌みが、禁忌(タブー)の本質なのである。

死や出産もまたタブーであったことはいうまでもない。

リーチの言葉にもどれば、中間領域、言葉をかえればどっちつかずの曖昧な状態にあるものはケガレとされたのである。前には身体から排泄されたものがケガレであるとした。これは身体の一部であり、排泄されてしまったから一部でもない、というどっちつかずのモノである。中間的・両義的な性格をもっているからである。死も同様である。死にまつわるタブーは二つにわけられる。身体と靈魂に対するものである。身体Ⅱ死体は風化するまではケガレの対象であった。靈

魂ハ死靈もまた完全に浄化されるのは民俗的思惟のうちでは、三十三回忌または五十回忌であった。死体も死靈も生と死、この世とあの世の中間領域にあるからタブーとされてきたのである。

ケガレは不幸の原因となる。罪の源泉でもある。しかし、古代ではケガレは外面的なものとしてうけとられてもきた。内面化されるのは精神文化の発展とともに仏教の果たした役割が大ききものであった。具体的には滅罪の經典としての法華經等の大乗經典の撰取であり、悔過の流行であった。その悔過の代表例として今ここでは仏名会をみてみよう。

〈仏名会〉

仏名会は御仏名、仏名懺悔ともよばれてきた。歳末にあたつて仏の名を唱えて、一年間の罪障を懺悔する行事である。

「蓋義抄」には、「仏名懺悔トテ歳暮ニ必過現未ノ三千仏ノ御名ヲ称シテ、罪障ヲ懺悔スル也。譬へば年

中所造罪障ヲ懺悔シテ三千諸仏ノ智元ニ照シ、歳霜ト共令消滅ニ意也」とある。また「公事根源」には、御仏名十九日と書きおいて、「けふより廿一日まで三ヶ日なり。或は一夜も例あり。仁寿殿の御本尊をうつして、御帳の中にかけて、南の額の間に、又南北に机をたてて、仏像塔形ををく、仏前に香華などをそなふ。ひさしに地獄變の御屏風をたつ。出居のすけ、最勝講のごとし。出居の前に、火櫃におり松やさす。女儒これをつとむ。公卿ひさしに著す。初夜、中夜、後夜、をのく御導師かはる。中略此仏名といふは、三世の諸仏の名号を唱て、六根の罪を滅する心なり。誠に仏名經にとかる所の功德は、はかりなきにや。宝龜五年十二月よりはじまる。承和の頃は、毎年仏名三ヶ日のあひだは、諸國にて殺生禁断のよし、格にみえたり」とある。これによれば仏名会は十二月十九日から二十一日の三日間にわたる行事であること。行事の内容は本尊を、南北に机をおいて仏像塔形を祀り、ひさしに地獄變の屏風をたてる様式であったこと。ここにおいて僧侶を招き、三千の諸仏の名を唱えて、罪を懺悔す

る行事であったことがわかる。この法令は、宝亀五年（七七四）、光仁天皇の時に始め、承和十三年（八四六）には諸国に広がった。承和十三年の太政官符に「五畿内七道諸国」、つまり諸国に向けて、十二月十五日より十七日までの三日国を仏名会にあてることを発令している。しかし、日程は仁寿三年の格により、十九日より二十一日に改められた。（年中行事秘抄）

仏名会は承和年間に一般化した行事であった。この行事が人びとの間にうけとめられるにはそれなりの理由があった。「上代日本人にも、罪穢の禊祓や怨霊の鎮撫によって現実の災厄の仏除が可能とする民俗信仰から逸早く皇極帝元年の祈雨、天武帝朱鳥元年の玉体不予の祈願などに、悔過が古来の禊祓に代わる抜除儀礼として営なまれ……」（中村康隆）るようになったのである。

和歌森太郎の言葉でいえば「悔過はいわば舶来の被としてたちまち重んじられ、受け容れられたわけである」ということになる。

祓えの思想から、悔過の思想への転換が仏名会を成

立させた基盤であった。しかし仏名会は平安末期から鎌倉期にかけて急速におとろえることになった。その原因は「自己の罪障の直視からの逃避としての来世信仰への心情変化」という従来の見解に対して、「源平の争乱に感受された六道輪廻の実態、つまり人生体験の深化による浄土信仰の高揚がらとみるべきであろう」と中村康隆は説明している。

仏教が民俗信仰と習合していく過程の一つに、禊祓（罪けがれをさって、除災招福するための浄め）にかわる儀礼として仏名会が位置したことは明らかである。つまり、仏教、とくに浄土教は、原始神道のケガレが身体的、感覚的、外面的であったのに対し、煩惱による結果として内面的、観念的なものへと深化させたのである。

いわば、仏教でのケガレとは煩惱である。そうした自分のケガレ、罪を自覚することによって悟りに至るのが仏教である。

しかし、仏教の淨穢觀にも限界はあった。習俗化した身体的、感覺的な淨穢觀をとりこむまでには至らなかった。民俗信仰には依然として残されてきたのである。そのため私達の仏教行事の背後には、日本古来の淨穢觀が残存して、実態を把握するには難しいものになっているのである。

〈仏教と民俗〉

さて、一年にわたって、毎月の仏教行事の代表的なものと民俗信仰とのかわりをみてきた。すでに周知のことで、あらたに書くべき必要はなかったことばかりである。しかし、私たちが実際に営んでいる仏教行事の実態は、仏教の側だけからの説明では充分ではないと考えたかった。いわば、あたえる側の論理と、それをうけとる側の論理の全体を通して構成されているのが仏教行事であり、そこから出発してみたかったのである。

しかし、仏教と民俗（信仰）との接点を通して、仏

教行事の意味を読みとろうとすることは、実際上きわめて困難なことである。仏教が民俗信仰の中に入り込んでいる場合もあれば、民俗信仰が仏教行事へひろがったものがあり、両者の接点は個々の行事によって、バラエティがあるからである。これを仏教の民俗化と民俗の仏教化とよぶ事によって、位置づけることも方法論上必要ではあるが、実態を明らかにするという点では抽象的にすぎるものである。実際に一つ一つの行事のなかに二つの方向をみることも多いからである。仏教と民俗とは、わかちがたく結ばれている、ということとは仏教が生活の中に全く定着してきた証しである、との判断もできるだろう。仏教の日本での歴史は民俗（信仰）との接触の過程でもある。両者の力動的な関係を通して実態を把握しようとする視点を持つ必要があるだろう。一つ一つの仏教行事はそうした営みのあらわれ、と考えられる。

（完）

◎読者の皆様へお願い

弊会会員の年会費は三、〇〇〇円です。月刊誌『浄土』を細々と発行しながら、念仏信仰の増進にと努力しています。新しい読者を広くご紹介下さい。

また、この機会に、『浄土』誌と会員諸兄の皆様とのより一層の繋がりをはかるために、従来よりたびたび企画されたことでもあります。が、誌面の数ページをさいて、不定期ながら随時、「読者のコーナー」を設けております。左記要領で、どうぞふるってご投稿下さい。誌面充実のために、宜しくご協力下さいませ。

一、内容 自由（生活の一コマや所感あるいは思うことなどをエッセイ風におま）
とめ下さい。

一、枚数 四百字用紙八枚程度

一、締切 毎月五日

法然上人鑽仰会

「浄土」購読規定

会費一カ年 金三、〇〇〇円

（送料不要）

浄土 四十九巻 十二月号

昭和十年五月二十日

第三種郵便物認可

昭和五十八年十一月二十五日 印刷

昭和五十八年十二月一日 発行

編集人 宮林 昭彦

発行人 佐藤 密雄

印刷人 関 二三男

印刷所 長谷川印刷株式会社

東京都千代田区飯田橋一十二一六

発行所 法然上人鑽仰会

電話東京二六二局五九四四番

〒103 振替東京八一八二二八七番

＜『浄土』誌連載にされた大長篇歴史小説＞

待望の本格八仏教V歴史巨篇！

毎日新聞社から好評のうちに全五巻発売中！！

念佛ひじり三国志

―法然とゆづる人々―

寺内大吉

著

四六判・上製 全五巻（各巻定価一三〇〇円 千各二五〇円）

直木賞作家が10年の歳月をかけて遂に完成

香り高い歴史ロマンの超大作

第三十七回 毎日出版文化賞受賞

毎日新聞社

〒100 東京都千代田区一ツ橋一ノ一

振替（東京）四一五六五三四

第四十九巻

十二月号

昭和十年五月二十日（第三種郵便物認可） 毎月一回一日発行
昭和五十八年十一月二十五日印刷 昭和五十八年十二月一日発行